

『三天正法経』考

石井昌子

はじめに

本稿は六朝期道教上清派の經典研究の一環である。これまで、『三洞奉道科誠儀範』⁽¹⁾（略称『科誠儀範』）の「経目」に著録されている經典と、現行道蔵本所収の同名或は類似していると考えられる經典との關係を經典目錄作成の作業として進めてきた。⁽²⁾ 本稿はその「経目」に著録する『上清除六天三天正法一卷』（略称経目本『三天正法経』）について考察するものである。

一 相当する現行本

現行道蔵本で、『三天正法経』の名のつく經典は、『道蔵』満字号、第八七六冊所収の『太上三天正法経』（略称、現行

本「三天正法經」の一經典のみである。

現行本「三天正法經」は「清虛小有天王撰」とある十一紙より成る小部の經典である。内容から考えると、原本はもう少し大部のものであったようである。現行本を前半部分と後半部分に分けて、その經典の成立を考察している研究者も⁽³⁾おるが、現行本は原本と比べて相当に欠落している箇所があると思われる。それを古道經の引用文等から補うことによつて「三天正法經」なる經典の全様に近づくことができよう。本稿の作業もその件を目標の一つとしているのではあるが。

まず現行本の内容を紹介しよう。冒頭に以下のようにいう。

九天真王与元始天王、俱生始炁之先、天光未朗、鬱積未澄、溟滓無涯、混沌太虛、浩汗流冥、七千余劫、玄景始分、九炁存焉、一炁相去九万九千九百九十歲、(青童君曰、時未有歲月、九炁既存、一炁相去九万九千九百九十里、一里為一歲也)、清炁高澄、濁混下布、九天真王元始天王、稟自然之胤、置於九天之号、(九天真王元始天王、始皆生於九炁之中、氣結而成形焉)、九炁玄凝成於九天罔也、日月星辰於是而明、(皆輪運周於九天之境也)、便有九真之帝、(青童君曰、九真者、九天之清炁凝成九宮之位也)、上真中真下真生於極上清微之天、(清微之天是始炁之澄也)、次中三真生於禹余之天、(禹余之天是元炁之澄也)、下有二真生於第三大赤天、(大赤天是玄炁之澄也)、三号既明、三元夫人從炁而生、以天為父、以炁為母、故号太素三元君、此各以炁自然之孕子也、生於三元君皆女子之号、(青童君曰、白素元君者則右白元君之母、黄素元君者則黄老中央君之母、紫素元君者則左无英君之母也、虛結空胎憑炁而生也)、各置宮策、便有上清宮之宮、(金晨玉童三千人、西華玉女三千人、侍給三元夫人也、在洞房宮)、二道輿隆拳号為太上大道君(註略)。

つづいて「六天之治」について以下の如く記す。

逮至黄帝、置立生民、(後生之人、起於黄帝也、黄帝結土為象、放於広野、三百年中、五色變化、能言能語、各在一方、故有儉秦互夷蛮差之類也、五姓合德、亦法自然、承上真之炁而得為人、能有生死之期壽命之會、若有骨炁係真、便為不死得補上仙、有不純之行死歸土也)、蠢以元炁五色衣冠、(皆稟元炁而生、衣以五綵之衣)、六天之治於此而興、故太上大道君給以鬼兵、使

於三代之中驅除惡人、(青童君曰、黃帝生民、各興殺害不稟自然、使天恚憤激、三五失正、故以六天之炁、使誅除惡民、善行精勸、思念長生、不犯三官則為種民、當授真經也)。

その後は、「九天真王授於太上大道君、太微靈都婉轉真三方文、衆書真籙以制六天三天之法」といい、つづいて、「三天九微玄都太真靈籙、出於九天真王、以伝太上及三天玉皇、元始天王以授西王母、靈飛太真太上丈人以授衆仙」と伝授の系譜を記す。

そして、太上大道君、九玄聖君、上相青童君が瓊宮玉殿に登り、侍女衆真の中で「神鳳之章九靈之曲」を歌い、歌いおわって還る、とある。ここまでで前段の終り⁽⁴⁾といった内容であるが、改行もなしに「清虚天王曰」とあって、「三天九微玄都太真陰陽靈籙」を受ける時の状況をのべている。

以下は「太上告後聖君曰」として「三天正法除六天之文」の受授について述べる。

最後は以下のように記す。

上清除六天之文三天正法、後聖君受太上、清虚小有天王撰集上仙真籙、総名為六天文三天上真正法、以捕万鬼収束衆邪、七百年三伝、一百年有其人聽再授、朱青縹三十尺為要信、青布四十三尺為密誓、金縷五双為指天大誓、男受投文不祭、女受当祭、相授齋三日或七日、又於齋内奉有經之師、好金十兩為通神之信、泄閉不従科條者、七世獲考如四極科法、佩書不經陰炁、陰炁濁施則身受殃大罪、身後為下鬼、奉之如法必登上清、八皇以此為祕、仙券有者太陰書名玉簡。

以上が現行本『三天正法経』の概略であるが、次項の古道経の引用文との関係を考察していく過程で、もっと明らかになるものと思われる。

二 古道經の引用文と現行本の関係

引用文のある古道經は、『真誥』⁽⁵⁾『無上秘要』⁽⁶⁾(略称『秘要』)『三洞珠囊』⁽⁷⁾(略称『珠囊』)『上清道類事相』⁽⁸⁾(略称『事相』)『道教義枢』⁽⁹⁾(略称『義枢』)『伝授三洞經戒法籙略説』⁽¹⁰⁾(略称『伝授三洞經』)『元始无量度人上品妙經四注』⁽¹¹⁾(略称『无量度人經』)『雲笈七籤』⁽¹²⁾(略称『七籤』)『上清佩符文五券訣』⁽¹³⁾『太平御覽』⁽¹⁴⁾(略称『御覽』)の十經典である。引用文と現行本の比較対照をするにあたって、現行本『三天正法經』に相当する個所が見当たらない引用文については、すべて記すことにした。現行本と原本との関係も一そう明らかになると思われるからである。引用が經名のみのも、その前後を記しておく。所在の表記は、卷・紙数・表裏・行とし卷二第十紙表三行は2/10 a 3のように示す。

《真誥》

① 5/2 a 6

君曰、道有除六天之文。三天正法、在世。

經名のみ引用である。經目本『三天正法經』の名称と一致する。「在世」とあるから世に流布していたことがわかる。『真誥』の引用は以上の一個条のみである。

《秘要》

① 6/2 b 2、4 b 3

(劫運品)

道曰、天関在天西北之角、与斗星相御、北斗七星則天関之綱柄、玉宸之華盖、梵行九天十二辰之氣、斗綱運関則九天並転、天有四候之門、九天合三十六候、一昼一夜則斗綱運関経一候之門、昼夜三十六日則経三十六候都竟、三十六候竟則是九天一転、三百六十輪為九天一周。

九天一周則六天之氣皆還上上三天、三天改運促会以催其度、三千六百周則為小劫交。

小劫交則九氣改正、万帝易位、民亡鬼滅、善存清治、六合寧一、九千九百集為大劫終。

大劫終則九天数尽、六天運窮、六天欲窮則氣激於三五、羣妖凶横、因時而行放毒威民、此皆運窮、数極乘機而鼓、以致於此地機在東南之分、九泉之下則九河之口、吐驗之靈機、上通天源之洵、注旁吞九洞之淵奥、十二時紀推四会之水東廻、一昼一夜則氣盈、氣盈並湊九河之機、昼夜三十三日機転西北、玄洲仙伯開天、万仙真書東海小童以授得道人、崑崙壙台靈飛天真太上大夫以授衆仙、得道者蓬萊高上真書玄成清天上皇上帝以伝霽封。

右出洞真三天正法経

現行本『三天正法経』に相当する個所は見当たらない。『七籤』の「劫運」の項に「上清三天正法経云」として、同内容の文が引用されているので、後に、『秘要』の引用文と対照し考察することにした。

② 22 / 1 b 9 / 10

(三界官府品)

六合紫房

右太上秘三天正法於其内。

経名のみ引用で、「三天正法」が「六合紫房に秘されている」という内容であるが、現行本『三天正法経』中には、「六合紫房」なる語は見当たらない。

③ 30 / 7 b 6

(經文出所品)

三。天。正。法。乃。与。元。始。俱。生。太。上。所。受。

「右出玉珮金鑑太極金書」とある。經名のみ引用であるが、現行本『三天正法經』にいう内容と一致する。

④ 31/10 b 3 ~ 11 b 2

(遇經宿分品)

凡名參上清金書玉籙者得見太上衆文籙。

凡名參太極白簡青文者得見除六天文三天正法。

凡名參方諸玄素紫名者得見太微靈都婉轉真文。

凡名參金闕玉名者得見九老仙都玄流紫極元君真書。

凡名參太清玉籍絳名者得見清和宮天帝君真書。

凡名參太素瓊簡金字者得見紫微玄宮玉帝飛天真書。

凡名參玄都丹台白玉金字者得見玄洲仙伯開天萬仙真書。

凡名參南極丹文紫籙者得見崑崙墟台飛天真文。

凡名參玄宮青金赤書者得見蓬萊高上真書。

凡名參三元宮琳札青書者得見天帝丈人黃上真書。

右出洞真三天正法經

引用文の「真文」「真書」の名称が、現行本『三天正法經』に相当する部分(10 a 4 ~ b 8)があるので以下に記す。

太上告後聖君曰、得佩三元大君紫文者、給玉童玉女各十二人、侍衛佩者身、得佩衆書真籙者、給玉童十人、侍衛佩者身、得佩太微靈都婉轉真三方文、給直符三十人玉女十二人、侍衛佩者身、得佩天帝君皇愍真書、給玉童十人、侍衛佩

者身、得佩太上元君真文、給玉女十二人、侍衛佩者身、得佩紫微玄宮玉文飛天真書、給玉童玉女各二十四人、侍衛佩者身、得佩蓬萊高上真書、給玉童十二人、侍衛佩者身、得佩天帝丈人黃上真書、給玉女百人、知吉凶、得佩玄洲仙伯開天万仙真書、給玉童十二人、侍衛佩者身、得佩廣生太真五嶽兵符、給玉女十二人、侍衛佩者身、得佩元始天王真書出有人無、又給玉童玉女各十二人、侍衛佩者身。

この引用文には「除六天文三天正法」の語はないが、現行本『三天正法經』には「三天正法除六天之文」(5a2)「除六天之文三天正法」(11a5)としてみえる。引用文中「太上衆文錄」「九老仙都玄流紫極元君真書」「清和宮天帝君真書」「崑崙壙台飛天真文」が現行本に見当たらないことになるが、原本には引用文のような形式で記述されていたのではないかと思われる。

⑤ 32/10b5-11b5

(衆聖伝経品)

上清清微天始青正法六天文、元始伝九天父母万始先生、

三天真書、一名金陽洞靈文三天玉章、所出伝皇上先生、

太上衆文錄、太上伝金闕帝君、三元玄台告六天符伝太上玄老、

三天正法、伝鬱絶真王、

三天九微玄都太真陰陽靈籙上元章、太帝丈人受之於太虚无上真君、

太微靈都宛軫真炁三法文、九天真王以授太上丈人、

九老仙都玄流紫極真元君、受之於三天玉童、驅虎豹符、九炁丈人受之玄私陰陵上帝、清和宮天帝君皇熙真書、太上元

君以授黃軒、紫微玄宮玉飛天真書、太清元始王以授西王母、

送我与我同光履行五嶽群仙奉迎出入河海万道開張役御六丁旋攝五行三天有命蕩除万凶割落掃穢流金滅殃、正法清通嚴

如威霜、華精奔奔龍輿昂昂、流青翠羽飛錦羅裳、所向所之靡不吉昌、万真來朝齊昇玉京、畢引悉三十六咽。

右出洞真三天正法經

この引用文で現行本『三天正法經』に相当する個所を以下に記す(2b10-3a7)。

九天真王授於太上大道君、太微靈都婉轉真三方文、衆書真籙以制六天三天之法、(註記省略)、三天九微玄都太真靈籙、出於九天真王以伝太上及三天玉皇、元始天王以授西王母、靈飛太真太上丈人以授衆仙。

引用文と現行本とを比較すると、いずれも原本なる經典からの引用であつて、現行本『三天正法經』からの引用とみることは当たつていないといえよう。

⑥ 32/16 a 3-9

(伝経年限品)

三天頌文、三天元始祕於三素之房九曲瓊室、千年一伝、

青童君曰、自唐之後得此文、乃七千人皆得馭飛龍而玄昇、晏鴻翮而騰翔、或託形輪化潜引而飛空也、如此不可具記、依三天格制、七百年一出。

右出洞真三天正法經

現行本『三天正法經』に相当する個所は見当たらない。

⑦ 43/13 a 7-b 1

(誦経品)

洞真三天正法經

三天頌文、凡受此文、誦之於別室、千徧通神、万徧通真、通神則与神交言、逆知吉凶、通真則与元始觀顔、入水不沈、入火不燃、経災履厄、騰景三清。

この文は『洞真三天正法經』の誦の功を述べているものであるが、「曰」としていないところからみると、引用文ということにはならないであろうが、同様の内容は經典にも説かれているはずである。現行本『三天正法經』は誦について説く個所は見当たらない。

⑧ 47 / 7 b 10 ~ 8 a 2

(受法持齋品)

洞真除六天之文三天正法經

右男受投書不祭、女受当祭不投書、皆齋七日或三日。

現行本『三天正法經』11 a 10・b 1に相当し、「書」が「文」、「不投書、皆」が「相授」の相違のみである。

⑨ 65 / 8 a 3 ~ b 7

(山居品)

凡修六天之文三天正法、遊行五嶽、履涉川沢、当行三天正一之祝威凶滅試召靈致仙之法、登山之初当先於山外、叩齒九通、閉目思五色之雲勃勃、四会掩冠一山及我身在雲炁之中、良久、見五嶽仙官及山形林木草沢禽獸万物悉来朝已仰、祝曰、

上帝出遊、日吉時良、玉華覆蓋、太一扶將、左翼白元、右輔无英、八帝九真、陵逢履昌、道我送我、與我同光、履行五嶽、群仙奉迎、出入河海、万道開張、役御六丁、旋撰五行、三天有命、蕩除万凶、割落掃穢、流金滅殃、正法清通、嚴如威霜、華精奔奔、龍輿昂昂、流青翠羽、飛錦羅裳、所向所之、靡不吉昌、万真来朝、齊昇玉京、畢引炁三十六咽。

右出洞真三天正法經

現行本『三天正法經』に相当する個所は見当たらない。

⑩ 66 / 11 a 7 ~ 9

(呪請品)

又叩齒三十六通、此為三天正法祝魔神方、常能行之則神兵侍衛、山川撰精、千妖交閉、万邪不干。

出典は「右出洞真黄素四四方經」とある。現行本『三天正法經』に相当する箇所は見当たらない。『七籤』の「三天正法神魔神第十」中の文と同文である。相違等については、『七籤』の引用文において考察する。

『秘要』の引用は以上十個条である。引用文が現行本『三天正法經』に完全に相当するのは⑧の二行ほどの引用文である。現行本『三天正法經』の特徴であり、原本との相違があることを示している証であろう。

《珠囊》

① 6 / 5 a 2 1 9

(立功禁忌品)

又(大玄都中宮女青律)云、凡上学之士受三天正法四明之科、佩帶真文出入三光、及冥臥息不得露頭、不著巾帽、及脫衣露形、毀慢身神、恥辱真文、令真靈遠逝空尸独在三犯、不得入仙也。五犯死入地獄、万劫還生不人之道也。又云、凡上学之士、受三天正法四極明科、不得妄入淹穢哭泣悲淚吊閻死喪、五犯伐功斷事不得入仙也。十犯死入地獄、万劫還生不人之道也。

この引用文は『大玄都中宮女青律』からのものであるが、現行本『三天正法經』に相当する部分があるので以下に示す。

①の部分 (9 a 5 1 9)

太上告後聖君曰、凡受三天正法、佩帶真文出入三光、及冥卧息不得露頭、不著巾帽、及脫衣露形、毀慢形神、恥辱真文、令貴靈遠逝空尸独在、犯之禁奪等削退陟之爵、學者慎之。

②の部分 (9 a 2 1 4)

太上告後聖君曰、凡受三天正法、不得妄入淹穢、哭泣悲淚、弔問死喪、犯者奪削退陟真之爵。

現行本『三天正法經』によると、この二個条を含む五條が「四極明科」に出ずることを記している。

② 8 / 23 a 2 ~ 4

(相好品)

又(太上八景經)云、三天正法秘於九天之上玉清金房紫戸之内、若有金名玉字紫藏玉髓之人、七百年内聽得三伝。

經名のみ引用であるが、現行本『三天正法經』と内容から考えて類似していると思われるのが、「真人此文秘太上靈都之宮、刻以紫為簡黃金為文」(3 a 4 ~ 5)、「六天文三天上真正法、以捕万鬼、収東衆邪、七百年三伝」(11 a 6 ~ 8)である。

③ 8 / 31 b 10 ~ 32 a 2

(諸天年号日月品)

三天正法經有上皇先生也、今看似老子以上皇元年下為周師者、定是天上後之上皇也。

經名のみ引用である。内容の面からみても現行本『三天正法經』に相当する箇所は見当たらない。

④ 9 / 1 a 4 ~ 2 a 6

(劫数品)

上清三天正法經云、天円十二綱、地方十二紀、天綱運関三百六十輪為一周、地紀推機三百三十輪為一度、天運三千六百周為陽勃、地転三千三百度為陰蝕、天氣極於太陰、地氣窮於太陽、故陽激則勃陰、否則蝕陰、陽勃蝕天、地氣反天、地氣反乃謂之小劫、小劫交則万帝易位、九氣改度日月縮運、陸地涌於九泉、水母決於五河、大鳥屯於龍門、五帝受會於玄都、当此之時凶穢滅種善民存焉、天運九千九百周為陽蝕、地転九千三百度為陰勃、陽蝕則氣窮於太陰、地勃則氣謀於太陽、故陽否則蝕陰、激則勃陽、陰蝕則天地改易、天地改易謂之大劫、大劫交則天翻地覆、海涌河決人淪山没、金玉化消六合冥一、白戸飄於無涯、孤爽悲於洪波、大鳥掃穢於靈嶽、水母受事於九河、五龍吐氣於北元、天馬臣轡以

徒魔、赤鎖伏精於辰門、歲星滅王於金羅、日月昏翳於三豪之館、五氣停暈於九嶺之上、龍王鼓花於東井之上、河侯受對於九海之下、聖君顯駕於明霞、五帝科簡於善惡、當此之時万惡絕種鬼魔滅迹、八荒四極万不遺一、至於天地之會、自非高上三天所不能禳、自无青籙白簡所不能脫也。

現行本『三天正法經』に相当する個所は見当たらないが、『秘要』の引用文①の「天円十二綱……」から最後の「六合冥一」までに相当し、文字の相違が二三あるのみで他は一致する。

⑤ 9 / 2 a 6 1 r a 3 b 1

(劫数品)

又云、天関在天西北之角、与斗星相御、北斗九星則天関之綱柄、王晨之花蓋、梵行九天十二辰之氣、斗綱運関則九天並転、天有四候之門、九天合三十六候、一昼一夜則斗綱運関經一候之門、昼夜三十六日則經三十六候都竟、三十六候竟則是九天一輪、三百六十輪為九天一周、九天一周則六天之氣皆還上上三天、天改運促会以催其度、三千六百周則為小劫、小劫交則九氣改正、万帝易位民亡鬼滅、善好清治六合寧一、九千九百周為大劫終、大劫終則九天数尽、六天運窮、六天運窮則氣激於三五、群妖凶横、因時而行放毒滅民、此皆運窮数極、乘機而鼓以至於此也、地機在東南之分、九泉之下則九河之口、吐翕之靈機、上通天源之陶、注傍吞九洞之淵澳、十二時紀推四会之水東廻、一昼一夜則氣盈並溲九河之機、昼夜三十三日機転西北廻、東北張西南翕、張則溢翕則虧、周於四會天源下流涌波是為一転、三百三十転為一度、一度則水母促会於龍王、河侯受對於三天、三千三百度謂之陰否、陰否則蝕、陰蝕水涌、水涌河決山淪地没、九千三百度為大劫之終、陰運之極、當此之時、九泉涌於洪波、水母鼓於龍門、山海冥一六合坦然、此陰運之竟、地氣之激也。

現行本『三天正法經』に相当する個所は見当たらない。④の引用文と同じく『秘要』引用文①の冒頭から「天円十二綱」の前文に相当する。文字の相違が二三あるのみで一致する。

⑥ 9 / 3 b 1 } 4 b 5

(劫数品)

又云、赤精開皇元年七月七日丙午中時、登琳琅之都月之上館、受符於元始天王、開金陽玉匱、玄和玉女口命出皇民錄譜、自開皇以前三象明曜以來、至于開皇經累億之劫、天地成敗、非可稱載、九天丈人於開皇筭定天元校推劫運、白簡青籙得道人名記皇民譜錄、數極唐堯是為小劫、一交其中損益有二十四萬人、應為得者自承唐之後數四十六丁亥、前後中間甲申之年乃小劫之會、人名應定在此之際陽九百六、二氣離合吉凶交會、得過者將為免哉、然甲申之後、甲申之前、其中壬辰之初數有九、周至庚子之年、吉凶候見其道、審明當有赤星見於東方、白彗干於月門、妖子統党於虫口乳群填尸於越川人啖其種、万里絕煙、強臣稱霸、弱主蒙塵、其後當有五靈、曷瑞義合本根龍精之後統族之君平滅四虜、應符者隆龍虎之世三六乃請民無橫命祚無危患、自唐之後、四十六丁亥是三劫之周、又從數五十五丁亥至壬辰癸巳是也、則是大劫之周、大劫之周天翻地覆、金玉化消、人淪山沒、六合冥一、天地之改運、真非所如何、惟高上三天、白簡青籙乃得冥鴻翻而騰翔、飛霄而盼目耳、此玄和玉女口命金陽玉匱論天地之成敗吉凶之是非也。

現行本『三天正法經』に相当する個所は見当たらない。

『珠囊』の引用は以上の六個条である。「上清三天正法經云」とする引用文は④⑤⑥の三個条であるが、いずれも現行本『三天正法經』に相当する個所は見当たらない。しかし、『秘要』の引用文①と④⑤が一致する。これらの関係については、すべての対照が終了した時点で検討することにした。

《事相》

① 1 / 4 a 5 . 6

(仙觀品)

上清三天正法経云、清微館三天頌文出其内。

現行本『三天正法経』に相当する個所は見当たらない。

② 1 / 4 b 7 ~ 9

(仙観品)

三天正法云、九玄帝君謂曰、結芒太霞館、流盼無窮齡、又青童君謂曰、藹味上清館、豈覺有余滯。

現行本『三天正法経』に相当する個所あり。「九玄帝君又称名而歌曰」の歌の一部(4 b 1)と「上相青童君又称名而歌其辞曰」の一部(4 b 10)。「味」と「沫」の相違のみである。

③ 2 / 11 a 4 . 5

(仙房品)

又(四極明科)云、三天正法、秘於九天之上玉清金房紫戸之内。

経名のみ引用であるが、内容の面からみても現行本『三天正法経』に相当する個所は見当たらない。

④ 3 / 9 a 4 . 5

(宝台品)

上清三天正法云、三元玄台六天符在其位。

現行本『三天正法経』に相当する個所は見当たらない。

⑤ 4 / 3 b 2 ~ 4

(瓊室品)

上清三天正法云、烏日之室、元始三天正法除六天之文、封其内也。

現行本『三天正法経』に相当する個所は見当たらない。

『事相』の引用は以上の五個条であるが、現行本『三天正法經』に相当する個所のあるものは引用文②のみである。「上清三天正法(經)云」とする①④⑤の引用文はすべて現行本には見当たらない。

《義枢》

① 2/5a10~b1

(三洞義第五)

謚子玉斧、長名翽、字道翔、師先生受上清三天正法曲素鳳文三十一卷。

經名のみ引用である。

『義枢』の引用は以上の一個条のみである。

《伝授三洞經》

① 下/1a2~8a3

三天正法除六天玉文

道曰、吾生眇奔之内、幽幽冥冥、幽冥之中生乎空洞、空洞之内生乎太無、太無變化而三炁明焉、三炁混沌生乎太虛、因虛而立洞、因洞而入無、因無而生有、有生而立空、空無之化虛生自然、上炁曰始、中炁曰元、下炁曰玄、玄炁所生出乎空、元炁所生出乎洞、始炁所生出乎無、故一生二、二生三、三生化生以至九玄、從九反一乃入道、真炁清成天、滓凝成地、中炁為和、以成於人、三炁分判、万化稟生、日月列照、五宿煥明、上三天生於三炁之精、處於無上之上極乎無極、故無極也、履大運所不能改、經大劫所不能易、總真高虛可謂高也、故号三天正法、九天之号亦生於三、三炁生三、故号九天、其六天總民応化順運、与日月推遷陰陽否勃、天地炁反小劫交周、万帝易位九炁改度、当此之時凶穢滅

種善民存焉、大劫交時、天翻地覆海涌河決、而万惡絕種鬼魔滅迹、八荒四極万不遺一、自非勤心於存思、佩除六天之文、修行三天正法、不得免過此厄、奉迎聖君於上清宮也、除六天文元始天王所出、始青飛玄之炁結成玉文以告六天、運周度交収炁檢神還反土上正一始生之天、佩者制靈使炁威撰十万、出空入無万道開張、經大劫所不能毀、履洪波所不能沈、万神稽首五嶽司迎、侍童六百人、玉女六十人、當衛佩文者身、太上所寶祕之六合紫房萬劫一伝、太上受之於九天真王、元君受之於三天玉童、黃軒受之於太上元君、西王母受之於元始天王、四極受之於東海小童、紫陽真人受之於太上大夫、寧封受之於清天上皇君、唐堯受之於後聖帝君、自唐之後得文乃七千人、皆得駕龍飛空也、高上玉晨鳳台曲素上經云、玄都九曲峻嶒鳳台、結自然鳳氣以成瓊房、処於九天之上玉京之陽虛生八會交真之氣、十折九曲洞達八方、上招扶搖之翮傍通、明於玄台之上、字方一文蔚煥爛洞明九天、飛鳳雲蓋紫氣鬱溟、遊麟之獸交躑馳橫、六領師子備于下闕、五帝玉仙執五色、命魔靈幡以威御五方、右侍太華玉女、左衛金仙玉童、各三千人、侍真典香日月快映七元、迴靈三晨齊景玄光、洞明瓊林振條玉籟激庭七宝華光流曜、上清即高上玉晨太上帝君所治、玄都丈人以鳳文真書、憂樂之曲、玄授於道君焉、如是上天万真及五嶽飛仙、悉皆以月五日十五日二十五日、一月三登鳳台、晏礼旋香、誦詠憂樂之辭也、上慶神真、下悲兆民、其辭虛微、玉朗洞清、四真稽首、万仙礼音、散香逸霄、流烟虛庭、凡上官已成真人及始学為仙者、莫不備修九天鳳氣、玄丘真書、誦憂樂之曲也、玄古皆万劫一伝、今有其人七百年中聽得三伝、得有其文飛行上清、登九曲鳳台、朝謁玉真也。輕泄失明七祖死責慎則神仙、太上授太極真人、以伝東海方諸青童大君、使伝道士宿有金名必為神仙、真人者佩之得見三元君、迎聖君於上清金闕。

万福曰、夫化化者不化、生生者不生、不化則長存不滅、不生則永劫無傾、斯道神妙修之可得而獲焉、凡一切有形道之委炁、含精通神、識自生動自行、明并日月、智落天地、思過鬼神、妙合陰陽、莫不由道而神理在焉、若乃延促齡於浩劫、擢朽神於億天、迴玄抱景、登真守元、万劫未始、千椿童顏、周天地於瞬息、役風雷於曾端、愛養群品、師範衆真、布天慈於種智、作仁父於本元、自非元始之法王太上之玄經孰能易之哉、而愚者、不知大道之化、元始之尊、不信神仙、

不死迴顏、駐年亦猶朝菌不知晦朔、蟪蛄不知春秋、吁可痛矣、且天迴星轉、地靜川流、四炁生成、五行交錯、風雲聚散、寒暑生殺、詎無主而宰之焉、蓋至道神化分靈布炁、羅絡統御而主之也、雖諸天五億世界、三千仙真聖尊、開方立域說法教化、變見無窮、真心法身、靈應難測、其統之者皆元始矣、即人身足行手持、目視耳聽、口語鼻歎、心通意識、魄靜魂動、皮膚居外、筋骨持內、血脉榮衛、晝夜運動、豈無君而御之哉、斯固司命納生、桃君保精、白元營魄、無英制魂、二十四真和理百神、太一元父總統我身、虛靜則永世不傾、煩躁則倏忽天齡矣。

夫人從虛無自然中来、受神抱識湛然清淨、及稟形之後則衆欲生而患、累起見世則三災九厄、十苦八難、痛痒疼酸、生老病死、煩惱形神、死則魂入幽牢、受諸苦惱晝夜考掠、魂神痛楚動經万劫、莫能自免、天尊大慈觀見衆生愛念在心、乃分靈布化、降迹接凡天上人間遊行教化、分身百万、散景億千、隨其機緣廣說經教、欲使衆生離苦永免輪迴、今天昔天法門常一也、經云、思微定志者、令人安神念道保其身也、思微者、念昔受生之初神本清淨也、定志者、除諸妄想絕思惟也、人所以生者神在形也、所以死者炁離身也、子欲長生定其心也、身有百神心為之主、故老君內觀經云、心者禁也、一身之主禁制形神使不邪也、心則神也、變化不測無定形也、魂在肝、魄在肺、精在腎、志在脾、神在心、所以字殊隨處名也、神明依泊從所名也、其神也、非青非白、非赤非黃、非大非小、非短非長、非曲非直、非柔非剛、非厚非薄、非凹非方、變化莫測、混合陰陽、大包天地、細入毫芒、制之則正、放之則狂、清淨則生、濁躁則亡、明照八表、暗迷一方、但能虛寂生道、自常永保無爲其身則昌、世以無形莫之能名、禍福吉凶悉由之矣、又云、從道受分謂之命、自一稟形謂之性、所以任物謂之心、心有所憶謂之意、意之所之謂之志、事無不知謂之智、智周万物謂之慧、所以通生謂之道、道者有而無形無而有情、變化不測通神群生、在人之身則為神明所謂心也、所以教人修道即修心也、教人修心即修道也、道不可見因生以明之也、生不可常用道以守之也、若生亡則道廢、道廢則生亡、生道合一則長生不死、羽化神仙、人不能保者以其不內觀於心故也、內觀不遺生道常存、又云、道以心得、心以道明、心明則道降、道降則心通、神明之在身、猶火之在卮、明從火起、火自炷存、炷因油潤、油籍卮停、四者若廢明何生焉、亦如明緣神照神、託心存

心、由形有形、以道全一、物不足明何依焉、所以謂之神、明者眼見耳聞、意知身覺、分別物理、微細悉知、由神以明故曰神明、老君曰、所以言虚心者遣其実也、無心者除其有也、定心者令不動也、安心者使不危也、靜心者令不亂也、正心者使不邪也、清心者令不濁也、淨心者使不穢也、此皆已有今使除也、心直者不反覆也、心平者無高低也、心明者不暗昧也、心通者不窒礙也、此皆本自然也、粗言數者余可思也、學道之夫當熟觀之矣。

詳夫三洞經教万術千方雖広、略不同皆制人之心也、而心有明暗、智有淺深、由形器有清濁、稟炁有薄厚耳、然是非好惡喜怒、趨捨莫不悉從於心、未知是心誰之所使若也、定由於心也、心何自取俎落哉、然則尋其本莫得其源、察其流靡窮、其際而究其終始則卒歸其自然也、嘗試論之、夫道以一動生万物、万物由一以生、一在人身即老君魂也、亦謂之道識也、照生我神即我魂也、亦謂之我識、既身由一生、神由道照則心由於神明矣、由是言之神見則心朗、神隱則心昏、神之隱見由心之清濁也、假如油清則燈照、油濁則景微矣。

經云、心則神也、神則心也、心神不殊、是以心由神、照則經之燈喻是也、智者諦詳之焉。

『伝授三洞經』の引用はこの一個条であるが、現行本『三天正法經』に相当する個所は見当たらない。

《无量度人經》

① 4 / 13 b 3 7

九炁者、按三天正法經、始炁生三炁、一曰赤洞、二曰白章、三曰清浩、元炁生三炁、一曰綠曷、二曰黄景、三曰蒼混、又曰白遁、玄炁生三炁、一曰紫融、二曰碧炎、三曰黒演、謂之九炁也。

現行本『三天正法經』には九炁の名称は見当たらないが、冒頭の文(前出)は九炁を論じているとみることができ、『无量度人經』の引用は以上の一個条である。

《七籤》

① 2 / 4 b 2 ~ 5 b 5

(劫運)

略

この引用文は『珠囊』④と全く同じもので、文字の相違が多少あるのみである。

② 2 / 5 b 5 ~ 6 b 9

略

①と同様、『珠囊』⑤と全く同じで、文字の相違があるのみである。

③ 2 / 6 b 9 ~ 7 b 3

略

①②と同様のことがいえる。『珠囊』の引用文⑥と一致する。『七籤』の引用文①②③と『珠囊』の引用文④⑤⑥は、「又云」とする個所も同じで、同一の經典からの引用か、その関係については後に検討する。

④ 4 / 2 b 9 ~ 3 a 2

(上清源統経目註序)

證有三子、其第三子名玉斧、長名翻、字道翔、道德淳瑩絶世無倫、師楊先生授上清三天正法曲素鳳文三十一卷、遯跡潜化。

経名のみ引用である。

⑤ 4 / 19 b 7 ~ 20 a 1

(玄都九真盟科九品伝経録)

玄都上品第五篇曰、消魔智慧、玉清隱書、宝洞飛誓、絶玄金章、紫鳳赤書、八景宸圖、金真玉光、靈書紫文、金璫玉珮、金根上經、三天正法、皆太上大道君、元始天王、金闕帝君之宝章、祕在玉清之宮金房紫戶之内。

經名のみの引用である。その經の秘して在る場所を「玉清之宮金房紫戶之内」とするのは、「珠囊」の引用文②と一致する。

⑥ 4 / 20 b 3 1 5

(玄都九真盟科九品伝経録)

三天正法、青繒三十尺、青布四十三尺、金鑲五双、以為密誓、上金十両通神之信。

現行本「三天正法経」11 a 8 以下の文に相当する、誓をなす物品の数量は完全に一致するが、脱句等があるので以下に記す。

朱青繒三十尺為要信、青布四十三尺為密誓、金鑲五双為指天大誓、——略——、好金十両為通神之信。

⑦ 5 / 3 b 6 . 7

(雷平山真人許君)

師楊君伝三天正法曲素鳳文。

經名のみの引用である。

⑧ 6 / 4 a 2 . 3

(三洞并序)

遵弟證、證子玉斧、皆受三天正法曲素鳳文。

經名のみの引用である。④の引用文と同内容のものである。

⑨ 6 / 7 a 10

(三) 洞品格

(八素真經云、……)

三。天。正。法。鳳。真。之。文。九。真。昇。玄。文。

經名のみの引用である。「中真之道」の經典の一つとしてあげている。

⑩ 6 / 18 b 9 ~ 19 a 1

(四) 輔

漢末有天師張道陵、精思西山太上親降、漢安元年五月一日、授以三。天。正。法。命為天師。

經名のみの引用である。現行本『三天正法經』には内容の面からも相当する箇所は見当たらないが、『三天内解經』に同内容の記述がある。⁽¹⁵⁾

⑪ 8 / 22 b 2 ~ 9

釈除六天玉文三天正法

除者罷也、六天者、赤虛天、泰玄都天、清皓天、泰玄天、泰玄倉天、泰清天、此六天起自黃帝、以來民人互興殺害不稟自然、六天之理、於茲而興、太上給以鬼兵、使於三代之中、驅除惡民、而六天臨治、自偽辭、太上下玉文、遂截六天之氣、更出三天正法、割惡救善、三天者、清微天、禹餘天、大赤天是也。

現行本『三天正法經』に相当する箇所あり。傍線①の部分は2 b 1以下に相当する。「理」が「治」、「茲」が「此」、「太上」が「故太上大道君」の相違がある。②は1 b 2に相当する。

⑫ 21 / 1 a 5 ~ b 3

(天地部)

總序天

三天正法經曰、九天真王与元始天王俱生始氣之先、天光未朗、鬱積未澄、溟滓無涯、混沌太虛、浩汗流冥、七十余劫、玄景始分、九氣存焉、一氣相去九万九千九百九十歲、清氣高澄、濁氣下布、九天真王元始天王、稟自然之孕置於九天之号、九氣玄凝日月星辰於是而明、便有九真之帝、上之三真生於極上清微之天、次中三真生於禹余之天、下有三真生於大赤之天。

現行本『三天正法經』の冒頭から1b4までに相当する。註記はない。文字の相違が少しある。

⑬ 40/10a9-10b6

(太玄都中宮女青律戒)

凡上学之士、受三天正法四明之科、佩帶真文出入三光及宜臥息、不得露頭不著巾帽、及脫衣露形、毀慢身神、恥辱真文、令真靈遠逝空尸濁在三犯、不得入仙也、五犯死入地獄万劫、還生不入之道。

凡上学之士、受三天正法四極明科、妄入穢穢哭泣悲淚吊問死喪、五犯伐功斷事、不得入仙也、十犯死入地獄万劫、還生不入之道。

『珠囊』①の引用文と全く同じ文で、引用文の傍線①②の部分が現行本『三天正法經』に相当する個所がある。

⑭ 46/7a7-8

(呪請品)

三天正法祝魔神第十

凡道士隱跡山林精思感靈、或誦洞經發響之時、多爲北帝大魔來試敗兆每至昏夜、当叩齒三十六通畢、乃呪曰、

北帝大魔王受事帝君前、泉曲之鬼四明鄂山、千妖混形九首同身、神虎放毒鹹滅雷霆、神公吐呪所戮無親、太微有命撰

録山川、鳴鈴交擲流煥九天、風火征伐神鋒十陳、兇試伏滅万精梟殘、祇毒敢起受閉三闕、請依洞法莫不如言、呪畢、

又叩齒三十六通、此名爲三天正法呪魔神方、常能行之則神兵侍衛、山川攝精、千妖受閉、万試不干。

『秘要』⑩の引用文は「三天正法呪魔神方」の部分のみを記し、「七籤」の項で検討すると述べた。文字の相違が二三あるが「呪」は「祝」に通ずる語であるから「七籤」が「祝」を「呪」としたとみてよいであろう。

⑮ 49 / 8 a 8 . 9

(玄門大論三一訣并叙)

三天正法云、従九返一乃入道。

現行本『三天正法経』に相当する箇所は見当たらない。『伝授三洞経』の傍線の部分と一致する。

⑯ 106 / 28 a 9

(許適真人伝)

師揚義受三天正法曲素鳳文。

経名のみ引用である。④⑦⑧の引用文と同じ経名である。

以上十六個条が「七籤」の引用文である。そのうち「云」として引用するものは①②③⑫⑮の五個条であるが、現行本『三天正法経』に相当するのは⑫の引用文のみである。これらのことを考え合わせると、前項で述べたように現行本『三天正法経』は原本の經典と比べると小部のものといえまいか。また、引用文⑮が『伝授三洞経』に相当する箇所があるということは、原本を考える上で重要である。

〈上清佩符文五卷訣〉

① 〈青券訣〉 9 a 1 1 4

赤天玄黄正法除六天文

玄黄飛玄之氣結成玉文、佩者与三氣同真匡制六天、檢氣撰魔、誡斬千凶、威御群靈、入出水火、万災不傷(右出三天

正法經

現行本『三天正法經』に相当する個所は見当らない。

② 〈白券訣〉 8a4~6

佩者、入水蛟龍開道万里、大劫交則能騰身玄虛、奉翊聖尊於上清宮（右出三天正法經）

現行本『三天正法經』に相当する個所は見当らない。

③ 〈絳券訣〉 2b5~3a1

清微天始青正法除六天

始青飛玄之氣結成玉文、佩者制靈使氣、威攝十方、出空入無、万道開張。

禹余天元白正法除六天文

元白飛玄之氣結成玉文、佩者匡制万靈、威神滅魔、辟却陽九、防過窮年、災所不傷、出入空玄、適意所行（右符出三天正法經）

天正法經

現行本『三天正法經』に相当する個所は見当らない。

『上清佩符文五券訣』の引用は以上の三個条である。いずれも現行本『三天正法經』に相当する個所は見当らないが、

三天、即ち「赤天」「清微天」「禹余天」それぞれの「正法除六天文」を引用していることは、原本には相当するものがあったと考えてよいのではなからうか。

〈御覽〉

① 672/6a1

太真科曰、清虚小有天王撰三天正法經。

現行本『三天正法経』の経題「太上三天正法経 清虚小有天王撰」に相当する。

② 676 / 4 a 13 ~ b 2

(簡章)

三天正法曰、三天九微玄都大真靈籙者、祕在太上靈都之宮、刻以紫玉為簡黄金為文、付五老上真仙都左公、封以紫藥玉芘、盛以雲錦之囊。

現行本『三天正法経』 3 a 4 ~ 10 に相当する。「者、」以下に四十二字ほど有る。

③ 679 / 1 a 10 · 11

(伝授下)

三天正法曰、太真靈籙、祕在太上靈都之宮、付五老上真仙都左公。

現行本『三天正法経』 3 a 5 以下に相当する。②の引用文と同じ箇所である。

【御覧】の引用は以上の三個条である。すべて現行本『三天正法経』に相当する。文字の相違、脱文等から考えて、現行本からの引用とみてさしつかえないと思われる。

三 古道経引用経典名とその相互関係について

前項では古道経に引用されている引用文と現行本との関係を考察した。その結果、現行本『三天正法経』に相当する引用文はわずかで、古道経が引用したであろう原本ともいふべき「三天正法経」なる経典を明らかにせねばならないことに気がついた。その作業をする前に、まず、古道経に引用する経典の呼称について検討することにする。

まず、古道経別に引用の経名を記す。

〈真誥〉

除六天之文三天正法……經名のみ、①

〈秘要〉

洞真三天正法經……引用文有、①④⑤⑥⑨ 經名のみ、⑦

洞真除六天之文三天正法經……經名のみ、⑧

除六天文三天正法……經名のみ、④

六天之文三天正法……經名のみ、⑨

三天正法……經名のみ、②③

三天正法祝魔神方……經名のみ、⑩

〈珠囊〉

上清三天正法經……引用文有、④⑤⑥

三天正法……經名のみ、①②

〈事相〉

上清三天正法經……引用文有、①

上清三天正法……引用文有、④⑤

三天正法……引用文有、② 經名のみ、②

〈義樞〉

三天正法曲素鳳文……經名のみ、①

〈伝授三洞経〉

三天正法除六天玉文……引用文有、①

〈无量度人經〉

三天正法經……引用文あり、①

〈七籤〉

上清三天正法經……引用文有、①②③

三天正法經……引用文有、⑫

除六天玉文三天正法……引用文有、⑪

三天正法……引用文有、⑮ 經名のみ、⑤⑥⑩

三天正法四極明科……經名のみ、⑬

三天正法曲素鳳文……經名のみ、④⑦⑧⑬

三天正法鳳真之文九真昇玄文……經名のみ、⑨

三天正法祝魔神……引用文有、⑭

三天正法祝魔神方……經名のみ、⑭

〈上清佩符文五卷訣〉

三天正法經……引用文有、①②③

〈御覽〉

三天一正法經……經名のみ、①

三天正法……引用文あり、②③

以上の結果を引用經名別に整理すると以下のようなになる。

〈除六天（之）文三天正法〉

經名のみ……【真誥】① 【秘要】④

〈洞真除六天之文三天正法〉

經名のみ……【秘要】⑧

〈除六天玉文三天正法〉

引用文有……【七籤】⑪

〈六天之文三天正法〉

經名のみ……【秘要】⑨

〈三天正法除六天玉文〉

引用文有……【伝授三天經】①

〈洞真三天正法經〉

引用文有……【秘要】①④⑤⑥⑨

經名のみ……【秘要】⑦

〈上清三天正法經〉

引用文有……【珠囊】④⑤⑥ 【事相】① 【七籤】①②③

〈上清三天正法〉

引用文有……【事相】④⑤

〈三天正法經〉

引用文有……【无量度人經】① 【七籤】⑫ 【上清佩符文五卷訣】①②③

〈三天一正法経〉

経名のみ……『御覧』①

〈三天正法〉

引用文有……『事相』② 『七籤』⑮ 『御覧』②③

経名のみ……『秘要』②③ 『珠囊』①② 『七籤』⑤⑥⑩⑬

〈三天正法祝魔神〉

引用文有……『七籤』⑭

〈三天正法祝魔神方〉

経名のみ……『秘要』⑩ 『七籤』⑭

〈三天正法曲素鳳文〉

経名のみ……『義枢』① 『七籤』④⑦⑧⑯

〈三天正法鳳真之文九真昇玄文〉

経名のみ……『七籤』⑨

以上整理した結果、二つに大別できる。即ち「除六天之文」が付くか否である。付く名称には「経」を付していないことが特徴といえる。さらに「伝授三洞経」を除いては、すべて「経名のみ」の引用である。「除六天之文」が付いていないものは、「洞真」や「上清」を冠しているか、或は全く付いていないかの違いはあっても、「三天正法(経)」ということになる。

経目本『三天正法経』の名称に一致するもの(「除六天之文」を付すもの)は、『真誥』『秘要』『伝授三洞経』『七籤』の四經典である。『真誥』『秘要』『七籤』は「経名のみ」の引用であるが、『伝授三洞経』の引用文は七紙余に及ぶ。その

引用文は下巻の冒頭から以下のように始まる

伝授三洞経戒方籙略説

三天正法除六天玉文

巻下の最後には「大唐先天元年歲次壬子十二月丙申十二日丁未、太清觀道士張万福謹記」とある。先天元(七一三)年と
いうことからすると、経目本『三天正法経』の「戒法籙略説」とみてよいであろう。その文が現行本『三天正法経』に全
く相当する個所がないということは、どう理解すればよいのであろうか。後ほど引用文相互の関係について検討するとこ
ろで論ずる。

「除六天之文」を付していない「三天正法(経)」は「引用文有」も「経名のみ」のものも多いが、以下に「引用文有」
のものをあげ、現行本『三天正法経』に相当するか否かを整理すると以下ようになる。

〈秘要の引用文〉

①④⑤⑥⑨

現行本に相当する引用文……⑤

現行本に相当する個所の見当らない引用文……①④⑥⑨

〈珠囊の引用文〉

④⑤⑥

すべて現行本に相当する個所は見当らない。

〈事相の引用文〉

①②③④⑤

現行本に相当する引用文は②のみで、他は現行本に相当する個所は見当らない。

〈无量度人経の引用文〉

①

現行本に相当する個所は見当らない。

〈七籤の引用文〉

①②③⑪⑫⑭⑮

現行本に相当する引用文……⑪⑫

現行本に相当する個所が見当たらない引用文……①②③④⑤

〈上清佩符文五卷訣〉 ①②③

①②③ともに現行本に相当する個所が見当たらない。

〈御覽の引用文〉 ②③

②③ともに現行本に相当する個所がある。

「三天正法（經）」の類からの引用文は全部で二十六個条あるが、現行本に相当する個所のあるものは六個条である。相当する個条も完全に一致するものは少ない。相当する引用文が少ないということは、引用した經典が現行本「三天正法經」より分量の多い原本なるものが存在したということになるか。以下、引用文相互の関係を考察し、結論を導ければと考える。

『伝授三洞經』の「三天正法除六天玉文」と他の經典の引用文との関係を考察する。この引用文に相当するものをあげると、

【秘要】の②の「六合紫房」は「秘之六合紫房」（下／2 a 8以下）とあり一致する。⑥の「青童君曰……飛空也」は「自唐之後、得文乃七千人、皆得駕龍飛空也」（下／2 b 4以下）に相当する。

【珠囊】の②は「太上八景經云」とする引用文であるが、「七百年中聽得三天」（下／3 b 3）と一致する。現行本「三天正法經」にも同内容のあることを前述したが、字句はこの両本の方が一致している。

【七籤】の⑮は「三天正法云、從九返一乃入道」の短い引用文であるが、下／1 a 10と全く一致する。

古道經の引用文中に「三天正法曲素鳳文」なる經名がある（『義樞』①、『七籤』④⑦⑧⑯）。許家の人々が師の楊羲から受けたもの、という内容のものであるが、ここにいう「曲素鳳文」は「除六天之文」といかなる関係にあるのか、巻下

／2b4以下に「高上玉晨鳳台曲素上経云」とあって、その中に「鳳文真書憂楽之曲玄授道君焉」という。ここでは検討すべき問題であることを提起するにとどめる。

【秘要】『珠囊』『七籤』の共通する引用文について検討する。

【珠囊】の④⑤⑥と【七籤】の①②③は全く同じ引用文で、【七籤】が【珠囊】から引用したと考えてよいであろう。文字の相違は多少あるが、「上清三天正法経云」「又云」「又云」としていることなどからも明らかである。【秘要】①は、引用文の冒頭から二十七行までが、【珠囊】の⑤と【七籤】②と一致する。文字の相違が少しあるのみである。後半部分「天円十二綱……六合冥一」の十四行が【珠囊】④と【七籤】①の冒頭から十五行と一致する。これら三經典の引用文の関係を以下に記す。

〈珠囊〉 〈七籤〉 〈秘要〉

④……………①……………①の後半部分

⑤……………②……………①の冒頭から二十七行

⑥……………③

この関係から考えられることは、【秘要】が引用した『三天正法経』も【珠囊】が引用したのも同内容のものであったのではなからうか、ということである。この三本の引用が現行本『三天正法経』に相当する個所が見当たらないことは、現行本は要のみを撰したとも考えられる。さらに、【伝授三洞経】とも互いに相当する個所が見当たらないことは、原本ともいえる『三天正法経』は現行本に比べて大部のものであったことが予想される。

以上の考察の結果をまとめると以下のようなことがいえる。

1 現行本『三天正法経』は、古道経が引用した『三天正法経』とは違い、原本ともいえるべき經典が存在していたことが予想される。その証拠として、引用文二十六箇条のうち、現行本に相当するものが六箇条しかないこと、それも完全に一致するものは少ないことなどがあげられる。相当する引用文中、『秘要』④と現行本の関係をみると、現行本が『秘要』の引用文を省略したと考えられる。これは『秘要』の引用した『洞真三天正法経』が原本に近く、現行本がそれらを引用したともいえる。いずれにしても、現行本『三天正法経』の成立の時期が問題となる。『御覽』の引用文二箇条がすべて現行本と一致するということも考え合わせる必要がある。

2 経目本『三天正法経』の名称「上清除六天三天正法」は、『真誥』『秘要』『七籤』に同名のものがある。経名のみであるが、『七籤』の「除六天玉文三天正法」は引用文のあるもので、現行本『三天正法経』に相当する箇所がある。この引用文「太上が玉文を下し、遂に六天の氣を截り、更に三天正法を出す」から推察すると、「除六天三天正法」の呼称が「除六天」の部分省略されて「三天正法」と称されるようになったとみるべきであろう。

3 各引用文から、原本ともいえるべき『三天正法経』の全容を見るには至らないが、いかなる内容のものであったかは推測できよう。なかでも『秘要』『珠囊』『七籤』の共通する引用文は重要といえる。しかし、『伝授三洞経』の「三天正法除六天玉文」との関係を考えてと、この「玉文」なるものが中心であって、『珠囊』『七籤』は「劫運(品)」の項に引用されている一部分にすぎないともいえる。

4 問題として残るのは、名称の「曲素鳳文」と「除六天之文」との関係、『高上玉晨鳳台曲素上経』について考察す

べきであったことなどである。後の課題としたい。⁽¹⁶⁾

註

- (1) 「道蔵」儀字号、第七六一冊所収。なお道蔵本の経題は「洞玄靈宝三洞奉道科戒営始」とあり、「三洞奉道科誠儀範」と命名するのは、敦煌ペリオ第二三三七号である。
- (2) 六朝期道教上清派の經典研究に関する拙稿は以下のとおりである。
 「道教上清派の經典目錄考——「上清經三十一卷」について——」(『創価大学人文論集』第六号所収)
 「黃庭經考——内景玉經・外景玉經の關係を中心に——」(『創価大学一般教育部論集』第十八号所収)
 「玉清隱書」考(『創価大学人文論集』第七号所収)
 「金虎真符」「神虎玉經真符」考(『創価大学人文論集』第八号所収)
 「黃庭經」考—その二—(『創価大学一般教育部論集』第二十号所収)
 「金真玉光經」考(『創価大学人文論集』第九号所収)
 「變化七十四方經」考——佚文集成を中心に——(『創価大学一般教育部論集』第二十一号所収)
 「八素真經」考(『創価大学人文論集』第十号所収)
 「飛步經」「飛行羽經」考(『創価大学人文論集』第十一号所収)
 「陽精三道經」考(『創価大学一般教育部論集』第二十四号所収)
 「九真中經」考(『創価大学人文論集』第十二号所収)
- (3) 尾崎正治「太上三天正法經」成立考(『東方宗教』第四十三号所収) 参照。
- (4) 同前
- (5) 「道蔵」安・定字号(第六三七—六四〇冊)所収。二十卷。梁の陶弘景(四五六一—五三三)編修。
- (6) 「道蔵」叔—孔字号(第七六八—七七九冊)所収。百卷。北周武帝の勅修になるもの。
- (7) 「道蔵」懷字号(第七八〇—七八二冊)所収。十卷。唐の王懸河の著作。
- (8) 「道蔵」姑字号(第七六五冊)所収。唐の王懸河の撰著。
- (9) 「道蔵」諸字号(第七六一・三冊)所収。孟安排集。成立七〇〇年ごろ。
- (10) 「道蔵」肆字号(第九九〇冊)所収。末尾に「大唐先年元(七二三)年、……大清觀道士張万福謹記」とある。

- (11) 『道蔵』寒字号(第三八・三九冊)所収。宋の陳景元集註。
- (12) 『道蔵』学し常字号(第六七七し七〇二冊)所収。百二十卷。張君房集。唐以前の古道経に依る所が多く、『秘要』とともに道教研究の重要資料である。
- (13) 『道蔵』位字号(第一九二冊)所収。青・白・絳・黒・黄巻訣各一卷。
- (14) 千卷。北宋太平興國二(九九七)年に李防等十四人が勅を奉じて撰し、同八(九八三)年に成る。
- (15) 『道蔵』満字号(第八七六冊)所収。巻上/5b7以下。
- (16) 拙稿「三天正法曲素鳳文」考(『中国学研究』第二十号所収)